「ＳＡＳＡ２０１４(第63次福井県学力調査)」での新たな試みについて

－これから必要とされる学力測定の在り方を探る－

調査研究部　学力調査分析ユニット
三谷和範　浦井加容子　黒川　一
河合正孝　和多田貴宇　中村宜裕

社会情勢の急激な変化に伴い、教育にも大きな転換の必要性が叫ばれている。SASA（福井県学力調査）についても、時代の要請、新しい学力観に照らし、これからの社会を生きる子どもたちに必要な力を測ることができるものに改善していかなければならない。

今年度は、出題設計を原点から見直し、調査問題、質問紙ともにいくつかの新たな試みを盛り込んだ。それらの趣旨、作成過程、成果等について考察する。

〈キーワード〉　SASA2014、出題設計、Ｃ チャレンジ問題、学級集団

Ⅰ　はじめに

福井県では、県内の小・中学校の児童・生徒の学習状況及び生活に関する意識や実態を把握するとともに、学習指導上の課題を明らかにし、学力向上に資することを目的として、独自の学力調査を実施している。福井県学力調査（通称「SASA」Student Academic Skills Assessment）は、昭和26年から毎年実施し、長い歴史を有している。その中で、到達度評価法の導入（第33次）、国語、算数／数学を、Ａ 基礎力問題・Ｂ 活用力問題（以下「Ａ問題」「Ｂ問題」と表記）で構成する（第59次）など、様々な改良を行いながら今年度63回目を迎えた。

昨今、社会情勢の変動は加速度を増し、これからを生きる子どもたちにとって必要となる学力観が大きく見直されており、そうした力をつけるために学校教育の在り方を改善することは急務である。これらを踏まえ、各学校における授業改善に有効にはたらくものにすべく、SASA2014の調査問題・質問紙作成に取り組んだ。その中での新たな取組みについて以下に述べる。

Ⅱ　これからの「ＳＡＳＡ」に求められるもの　－新たな試みの背景－

先に述べたように、福井県学力調査は長い歴史の中でその時々の課題や時代のニーズに応じて改良を重ねてきたが、現在は教育界の一大転換期と言える。そのような中、今一度過去の出題や調査結果に見る課題を整理し直し、今回の出題で測るべき項目、分野などを精選する必要があった。

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会の様々な分野で、活動の基盤としての重要性が増してくる「知識基盤社会」であると言われている。そういった知識基盤社会化やグローバル化が進むにつれて、アイディアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させ、異なる文化との共存や国際協力の必要性を増大させている。そのような状況の中、これからの社会を生きる子どもたちには、変化に対応する力、自らの考えをもつ力、また他者と協調し協働しながら生きていく力が必要になってくる。

それらに伴い、OECD（経済協力開発機構）のPISA調査では、読解力、科学的リテラシー、数学的リテラシーなど様々なテーマのもと調査が行われ、実生活の様々な場面で直面する課題に知識や技能を活用する力、いわゆるPISA型学力が注目されている。また全国学力・学習状況調査においても、PISA型学力を意識した「Ｂ 主として『活用』に関する問題」が重要視され、知識・技能等を実生活の様々な場面

に活用する力や、課題解決のために様々な構想を立て実践し評価・改善する力を高めることが求められている。

また、今の世界の経済的技術的発展の先端を見据え、これからの社会に必要な力として「21世紀型スキル」が提唱されている（図１）。創造性や批判的思考、シチズンシップなど新しいものを生み出す力、コラボレーションやシチズンシップなど協働する力、社会に意欲的に参画する力が必要となってくる。

以上のことから、SASAにおいても従来のＡ問題、Ｂ問題を更に精選し、加えてPISA型学力、また21世紀型スキルを意識した問題設定、他者、集団としての協働の意義に迫る意識を測る必要があると考えた。

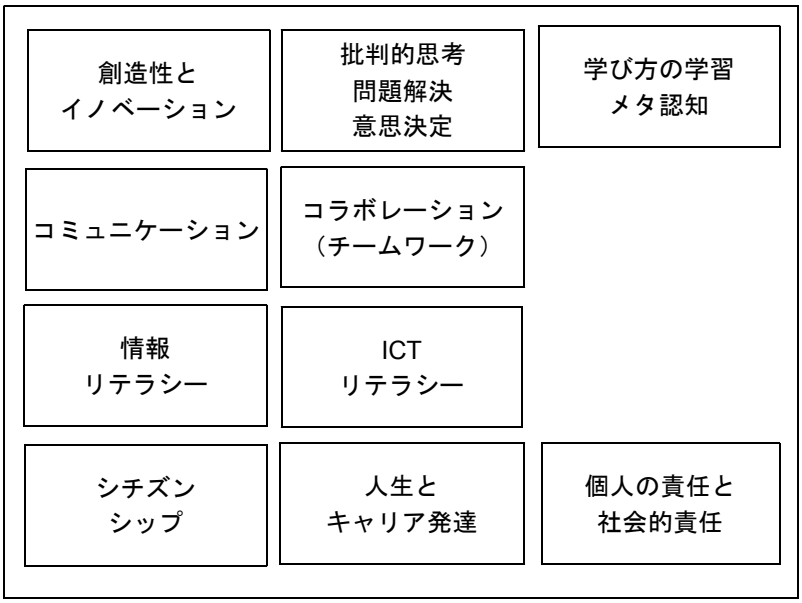

図１　21世紀型スキル

Ⅲ　「ＳＡＳＡ2014」の特徴

１　マトリクス作成に基づく問題出題設計の見直し

(1)　目的・目標

本調査は､県内の児童・生徒の学習状況および学習と生活に関する意識や実態を把握するとともに、調査結果を分析することにより学習指導上の課題を明らかにし、学力向上に資することを目的とすることは例年のとおりである。

加えて、「福井新々元気宣言」推進に関する施策（平成26年４月）を受け、ふるさと教育・古典教育の推進、白川文字学を活用した漢字教育の充実などを踏まえた出題を目標として問題作成に取り組んだ。

(2)　マトリクスの作成

(1)の目標を達成するため、各教科で学習指導要領の内容とSASAおよび全国学力・学習状況調査の過去８年間の出題や課題等を対照させた一覧表（以下マトリクスと表記）を作成し、過去のSASA（福井県学力調査）や全国学力・学習状況調査における課題の洗い出しを行った。

SASAでは８年（教科により20年）分、全国学力・学習状況調査では平成19年度のものから平成26年度までの８年分の出題をマトリクス上に整理し、次の３つを重点的に出題することとした。

・過去の調査（福井県・全国共）において、調査が不十分である内容
・過去の調査において、課題とみられた内容
・今年度(平成26年度)の全国学力・学習状況調査における課題に関連した内容

である。

以下にマトリクスの一例を示す。

表１　マトリクス例〈中学校数学〉

領域	学年	章	節	平成26年 全国学力調査 内容	正答率	A基礎No.	B活用No.	観点	平成26年 SASA2014（第63次） 内容	正答率	A基礎No.	B活用No.	観点	平成25年 全国学力調査 内容	正答率	A基礎No.	B活用No.	観点	平成25年 SASA2013（第62次） 内容	正答率	A基礎No.	B活用No.	観点
A 数と式	小			3/4÷5/6	92.3	1(1)		技						5/8×3/4	88.8	1(1)		技					
				線対称な図形を見分ける	95.9	4(1)		技						分数の意味大小を かく	89.8	4(1)		技					
	第1学年	1章 正の数・負の数	1 正の数・負の数	−7の絶対値	92.1	1(3)		知						絶対値の意味について いわ	82.3	1(3)		知					
				0を基準にして、で対応する	92.4	1(4)		知						数直線 イ ロ の 対応	67.6	1(4)		知					
				$2\times(-5^2)$	83.4	1(2)		技	指数を 用いた四則計算		1(1)		技	$5\times(4-7)$	93.0	1(2)		技	$(-3)^2-3\times(-7)$	72.2	1(1)		技
			2 正の数・負の数の計算						四則計算の順序		4		知										
		2章 文字の式	1 文字を使った式	長方形の面積を表す式	94.6	2(4)		技						長方形でよりよい形 ものを	74.8	2(2)		技	人口の増加を文字式で	55.2	4		知
				ab^2の値	87.9	2(3)		技	分数に なる事象を式で表す		3		技	小学校 ひかれの事情 いの理	38.7	2(3)		技	400円で 買えるこうせ事情を	62.2	3		知
			2 文字式の計算	1次の式で 文字を使って表す	51.5	2(1)		技						1時間 に 一 の 速	68.2		6(1)	技					
				$10xy\div5x$	95.7	2(2)		技						ロ ハ ニ で 表 さ れ る 数 を 選 ぶ	67.8		6(2)	考					
														ハ ニ の ロ に な る 場 合 を 説 明	35.1		6(3)	考					
		3章 方程式	1 方程式	等式が 行われた場合	92.4	3(1)		知						式変形して よい理由	77.9	2(4)		知	$(-x+5)\times3=2$	69.5	2		技
				$(x-1)/3=2$を解く	70.6	3(2)		技						$3x+7=9$	80.7	3(1)		技					
			2 方程式の利用																和が対称 の 図形 の 周 を 求	58.3		1(1)	技
																			面の 長さ の 関係 から 比	14.4		1(2)	考
	第2学年	1章 式の計算	1 式の計算						分数式の計算		1(2)		技	$2/3a\div(-5/2a\times3/a)$	88.9	2(1)		技					
									3項の乗除		1(3)		技						$1/2x(x+1)-1/2x(x-4)$	68.5	1(2)		技
									等式変形		5		知										
			2 文字式の利用	連続 する 2 つ の 文 字 式 で 表 す	71.8		2(1)	考	説明			1(1)	考	連続 の 自然 数 の 積 の 特 徴	45.0		2(1)	考					
				文 字 式 を 使 い で 考 え る	75.1		2(2)	考	予想			1(2)	考	連続 の 自然 数 の 和 の 特 徴	46.4		2(2)	考					
				文 字 式 を 使 い で 説 明 す る	57.2		2(3)	考															
		2章 連立方程式	1 連立方程式	$y=3x-2,y=2x+3$	78.4	3(4)		技	x=a−bの型の方程式		2		技	二元一次方程式の解	83.7	3(2)		知	$2x+5y=12,x=2y-3$	79.5	5		技
			2 連立方程式の利用	問題に 適合し て 立式 する	81.8	3(3)		知						数量 関係 の 関係 から 立式 する	89.0	3(3)		技					
B 図形	第1学年	5章 平面図形	1 直線図形と移動	図形を動かした後 の 図形 で よ ま	48.6	4(3)		技						形 を 移動 の 見 方 を 考 え る	62.9	4(3)		知	対称 移動 - 点 対 称 移 動	65.6	7		知
			2 基本の作図	垂直二等分線の性質	57.1	4(2)		知	垂直二等分線の作図		7		技	角の二等分線の性質	53.6	4(2)		知	二角形の底辺を 作図	49.0	6		技
			3 円とおうぎ形																				
		6章 空間図形	1 立体と空間図形	直線と平行な面	88.1	5(1)		知	空間内の平面		11		知	垂線の性質問題	66.0	5(1)		知	面と垂直な面	66.9	11		知
				線分で 平面 を 表 し て 平行 な 平	87.6	5(2)		知															
				立体 に あ た る 長 方 形 を 選	80.5		1(1)	考						四角錐の投影図	88.9	5(2)		技					
				立体 に あ た る 長 方 形 を 選	96.6		1(2)	考															
				組み合せ 柱の 方 を 説明	63.9		1(3)	考															
			2 立体の表面積と体積	円錐の 展開図と 母線	75.3	5(3)		技	円錐の展開図		6		技						円柱の 側面 積 を 選 ぶ	48.8	8		技
				円柱と円錐の体積	52.6	5(4)		知															
									円柱と球の体積		10		考	円柱と球の体積	51.5	5(3)		知	半球と円錐の体積	52.2	10		考
	第2学年	4章 図形の調べ方	1 平行と合同	二角形の外角の性質	80.7	6(2)		知						平行線と角	84.5	6(1)		知	対角線が平行になる条件	76.5	9		知
				四角形の辺と辺・ と の 関係	53.0	6(3)		知	多角形の内角の和の公式		8		考	外角の大きさ	65.6	6(2)		知					
									正多角形の外角		9		技										
			2 証明	長方形 で AC=BD の 理由 を	68.5	6(1)		技							78.9	7(2)		技					
				合同条件を選ぶ	80.4	7		知						合同条件を選ぶ	83.9	7(1)		知					
				四角形 が 平行四辺形 になる 条件	79.6	8		知						平行四辺形の対角の関係	57.2	7(3)		知					
			合同の証明	59.0		4(1)	考							証明の一部が 穴埋 め で ある	63.9	8		知					
				証明の 仕方について 説明	34.5		4(2)	考						証明 に 基 づ いて 説明	37.5		4(1)	考					
														平行四辺形になる条件	59.7		4(2)	考					

２　Ｃ チャレンジ問題の新設

(1)　目的・目標

今までのSASA、また全国学力・学習状況調査における福井県の課題としては、Ａ問題に比べて、Ｂ問題の正答率が低いということが挙げられる。また全国的に進む学力の二極化に比べると、福井県は下位は少ないが、同時に上位の層も少ない傾向が見られる。また全国学力・学習状況調査では常に上位に位置しているが、高校教育に結びついていないという現状も見られる。それらの点から、下位の子どもたちの学力は保障しながら、かつ上位の子どもたちの能力を高める授業改善が必要であると考えた。先にも述べたとおり、問題のための問題、教科における問題ではなく、自分たちの生活、またこれから生きていくことに結びつけられるような力を高めていくことを念頭におき、「Ｃ チャレンジ問題」（以下「Ｃ問題」と表記）を設定した。

上記の点に基づき１つの観点や内容（単元)、また教科書の記述内容にとどまらない問題を設定した。今年度出題した内容については以下のとおりである。

・読解力、記述力を必要とする内容
・領域、観点を複合した総合的な思考力を測る内容
・教科横断的な内容

どの観点においても、必要とする知識は既習範囲内とし、新たな知識を必要としないこととした。今年度設定した各教科のテーマは以下のとおりである。

【 SASA2014　Ｃ チャレンジ問題　各教科のテーマと出題の主旨 】

小学校国語

日常生活で触れる様々なタイプの資料を基に、複数の条件や要望に応える文章を記述

ある家族に旅行計画を提案する場面で､家族のそれぞれの希望を考慮して資料を読み取り、行き先を決定する。そして、自分の経験と結びつけながら、読み手が納得するおすすめ文を書くことが出来るかを問う。

小学校算数

複雑な条件を整理し、問題中に示された考え方を即時に利用して未習の問題を解決

旅行計画を立てる場面で、複雑な条件を整理して列車の発車時刻を絞ること、また、「基本料金＋延長料金」という料金体系の仕組みを理解した上で、これを活用して、正解が複数個存在するような日常生活に見られる課題を算数を用いて解決する力を問う。

小学校社会

資料を客観的・批判的に見つめることによる、日本の未来についての予想と考察

日本の農業の特徴や交通の問題点を複数の資料から読み取る。また、読み取ったことをもとに、日本の未来を予想したり、日本の今後の在り方について産業、政治、環境など様々な視点から考えたりする力を問う。

小学校理科

順序立てて思考を重ねることによる、はじめて出会う課題の解決や未習の知識との結合

太陽と影の動きに関する知識を基に、条件に当てはまるかどうかを判断するための思考力を問う。また、物質の性質を利用して、３段階で物質を見分ける手順を考える。それぞれの物質の性質について、共通点、相違点を指摘することができる知識と、正しい順序で実験するための技能・思考力が必要になる。

中学校国語

ふるさと福井の偉人の世界から自分の生き方を考える「古典」と「現在の生活」の融合

中学校では触れる機会が少ない古典の世界に、福井の偉人橘曙覧の歌を通して触れ、さらに曙覧と同じように歌を作ることで、古典の世界と現代がかけ離れたものでないことを知り、複数の資料と合わせて読みながら自分の生き方を考えていく。

中学校数学

日常事象を数学の眼で捉えて数学の舞台にのせ、未知の関係を探究

地図上に示された華氏温度と摂氏温度という、表もグラフも与えられていない２つの数量について、関数的な見方を持ち込み、関係を明らかにして説明する力を問う。さらに日常生活に見られる簡単な英語による説明書を用いて問題解決するという、教科を超えた総合的な力を問う。

中学校社会

日本そして世界が直面する課題について「国際的視野」から多角的に考察

近年問題視されている日本の人口減少が経済成長に与える影響について、アメリカ、ＥＵ、新興国との比較から理解を深める。また、市場統合と拡大により発展を遂げたＥＵの内情について考察することで、経済格差の実態を学び、世界的課題に対する問題意識を啓発する。

中学校理科

日常的な事象を科学的視点から捉えて論理的に思考

バイオリンの音の高低の原理（物理分野）、ガス漏れ警報機の設置位置の決め方（化学分野）、瞳孔反射のしくみ（生物分野）など日常的な事象について科学的にアプローチする。また、植物の光合成に関する実験を通して、疑問→実験→結果→分析・考察→結論という科学的な探究過程を体験する。

中学校英語

英語を読み、聞き、英語で答える「オールイングリッシュ」へのステップ

英語による説明文と道案内を元に、地図上に出発地から目的地までのルートを書き込み、英語で順序立てて説明できるか、また、英語で聞いた内容に関する英語での質問に対して正しい英語での受け答えができるかを問い、テーマに迫る。

(2)　ワーキンググループでの取組み

問題作成にあたっては、各校種・教科・質問紙毎に問題作成委員会（ワーキンググループ）を組織している。それぞれ、県教育庁指導主事等（２名）、教育研究所員（２～３名）、県内小・中学校教員（３名）で構成している。加えて、国語、算数／数学では、それぞれ活用力問題作成のアドバイザーを委嘱している。ワーキンググループにおける問題作成の取組みの一例を以下に示す。

①　小学校社会

テーマ　「資料を客観的・批判的に見つめることによる、日本の未来についての予想と考察」

社会科の目標は「深い社会認識を通して公民的資質を育成すること」である。グローバル化が進み、世界との結びつきが強まる中で、地域、日本、また世界に生きる公民として、今まさに直面している社会の状況や変化をつぶさに把握したり理解したりして、これからの自分たちの生き方、社会の在り方を創造していく力がこれから益々必要となってくる。ただ新しい知識や技能を獲得していくだけではなく、獲得された知識や新しい情報を基に、社会を客観的に、また批判的に見つめ、一人の人間として、またすべての人が安全で幸福を追求できる社会について考察することを大きなねらいとした。教科の枠にとらわれず、OECDが提唱するキーコンピテンシーに関わる力、国際バカロレアが目指す論理的思考力や表現力、探究心等の育成を重視することも問題作成の大きな柱とした。

近年のSASAでは、「複数の資料を関連付けて読み取ること、読み取ったことから考察すること」に課題が見られる。複数の資料から目的に即した必要な情報を的確に読み取ることは、非常に重要な力であり、社会科の授業で身につけさせたい力でもある。そのような力を測る問題作成に努めた。

上記のねらいに即した問題作成過程のなかで、多くの課題に直面した。まずは、論理的に思考し表現させるための工夫である。先にも述べたように複数の資料から「特徴」などを読み取ること、またそこから考えられる「問題点」や「解決策」などについて考察させることは、福井県の児童の課題であり、これから必要な力である。しかしながら小学生の発達段階を考慮すると難易度は高い。よって設問の仕方を工夫し、「特徴」と「問題点」を分けて考えられるよう問いを２つに分け、解答欄にも仕切りを入れた。そうすることで児童は論理的に思考し、表現することができると考えた。解答欄を分けることで、児童は資料活用能力と思考力・判断力・表現力のどこでつまずいているのかを分析することもできると考えた。

また、題材の選定、設問の設定にも配慮を要した。社会科では様々なグラフ、資料が扱われる。しかしながらその資料の読み取りには、語彙力、計算力などが必要となり、社会科以外の既習内容を把握する必要がある。当初は、他教科との融合問題も考えていたが、既習内容でないこともあり断念した。

今回、取り上げた単元は、「我が国の食料生産」「我が国の工業生産」である。国土が狭く、資源に乏しい日本において、TPPなど農業、工業に関する問題は、新聞やテレビなどのメディアで毎日のように報道されており、無視することはできない問題である。しかしながら小学校５年生までは政治面、経済面に関する学習内容は非常に少ない。また歴史も学習していないこともあり、歴史的な側面から考えることも困難である。社会科では社会的事象に対して、多面的に、また多角的に捉え、問題点や

解決方法を考えさせることが大変重要である。その点をいかに考えさせるかにも配慮を要した。

② 中学校国語

テーマ 「ふるさと福井の偉人の作品世界から自分の生き方を考える、“古典”と“現代の生活”の融合」

国語の出題は、実に多様な切り口が考えられる。故に、軸となる方針を明確にしておく必要がある。今回は、次の３つのコンセプトを掲げ、問題作成に取り組んだ。

○ 複数の資料から総合的に思考し、自分の考えを書く

PISA型読解力の強化が叫ばれて以来、複数の資料を読み取り、総合的に思考・判断して自分の考えを記述することは、経年の課題である。文部科学省は、「読解力向上に関する指導資料」の中で、そのねらいについて、「文章のような『連続型テキスト』及び図表のような『非連続型テキスト』を幅広く読み、これらを広く学校内外の様々な状況に関連付けて、組み立て、展開し、意味を理解することをどの程度行えるか」と述べている。

今回は、橘曙覧の和歌３首とそれに関する会話文に加え、百人一首、クラーク博士の言葉、高校生の意識調査結果グラフを合わせて読み取り、自分の生き方について考えさせる問題を設定した。

○ 素材の厳選（古典・ふるさと）－教科書掲載作品のみにとどまらず、広い視野を持って

平成16年２月の文化審議会答申において「現在以上に古典に触れることができるような授業の在り方が望まれる」と明言されて以来、古典重視の方針は段階的に推し進められてきた。現行学習指導要領においても「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が謳われ、「古典に一層親しむ態度を育成することを重視する」としている。グローバル化が加速し、めまぐるしく変化する現代社会の中で改めてその価値が見直され、より視野を広げて有機的に指導することが可能となった古典に焦点を当て、その可能性を探りたいと考えた。

このような考えに基づき、様々な素材を検討し、最終的にはふるさと教育の視点から福井県に縁のある橘曙覧『独楽吟』を主たる素材に決定した。

○ 道徳的視点 － 生き方について考える

現行学習指導要領では、「道徳教育の目標に基づき、道徳の内容について、各教科の特質に応じて適切な指導をすること」を明示している。また、「中学校においては思春期の特質を考慮し、社会とのかかわりを踏まえ、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実すること」としている。また、OECDの掲げるキーコンピテンシーの中に、「人生設計や個人の計画を作り実行する能力」がある。これは、「人生の意義を見失いがちな変化し続ける環境の中で、自らの人生に一定のストーリーを作るとともに意味や目的を与える力」であり、「社会の中で自分は何をしたいのか、社会とどうかかわるのか、人間の幸福な暮らしと調和や発展をどうリンクさせるのか考えることが重要」であるとしている。

これらを受け、曙覧の歌に表れた世界観を読み取り、更に一見対照的に見えるクラーク博士の言葉、そして年代の近い高校生の考え方と比較しながら、自分はどのような点に価値をおいて生きていくのかを考えさせる問題を設定した。

素材と大まかな原案が定まった後、以下のようなポイントから、設問を４問に絞った。

・文脈から語句の意味を問うもの
・五感を用いた和歌の読み取り、百人一首にかかわるもの
・主体的に表現し、またそれを交流する力を問うもの
・複数の資料を読み取り、総合的に判断して生き方を記述するもの

問題作成過程においては、「難しすぎないか」「授業でやっているか」「設定が凝り過ぎではないか」「情報量が多すぎないか」など、多くの課題に直面した。しかし、アドバイザーからの助言をもとにワーキンググループで協議し、現実に即した場面設定、できる限りシンプルな問いになるよう改善を重ねてきた。

【アドバイザー　山形大学　三浦 登志一 教授からの助言】

活用力を問う問題に関する基本事項
① 幅広いテキスト(文章・図表など）を対象とする。
② 課題性を持たせ、解決に向かわせていく。
③ “自分の大切さ”を感じられる問を用意する。(あなたはどう考える？)
④ 設定の把握に時間を要するものは良くない。(凝りすぎた設定・情報量過多)
⑤ 子どもにとって魅力ある言語活動・文章自体のもつ力を生かす。

これらの条件を完全に満たすものになったとは言えないかもしれないが、少なくとも①、③、④については十分考慮したつもりである。

ふるさと福井の偉人橘曙覧の歌の世界に触れ、曙覧と同じように歌を作ることで今も変わらぬ日本人の感性を実感し、さらに近現代における複数の資料を合わせて読みながら自分の生き方についてじっくりと考えるきっかけとなればと考える。

３　学級集団の状況と学力との関連を測るための質問紙内容の改訂

(1)　学級の状況と学力との関連の分析

日本の学校教育システムの特徴の１つに、学級単位で行われる教育活動が多いことが挙げられる。したがって、日本の教師は、学級集団をマネジメントし、良好な状態につくり上げていく学級経営に関する力量が求められてきた。一方、近年の児童・生徒の変化により、集団活動や一斉指導等の学級経営が困難な状況が増えてきたことは、“学級崩壊”等のキーワードに示されるとおりである。この状況を受けて、教育研究分野では学級経営論が盛んとなり、学級集団の状況を様々な指標から量的データとして測る質問紙も盛んに作成され、学級経営に活用されるようになってきた。これらの質問紙から測ることのできる学級集団の状況と学力との関連を分析した複数の先行研究では、「良好な学級集団は、学力が伸びる」ことが実証的に示されている。そしてそれは、多くの教師の経験知と一致するところである。

ワーキンググループでは、以上の研究の流れを受け、本県においても学級集団の状況を測ることが望ましいと考え、従来のSASA質問紙で問うていた個人の生活や学習に対する意識に加えて、所属する学級集団の状況に対する認知を問う質問項目を作成し、追加することとした。学級集団の状況と学力との関連を分析することを主な目的としている。

(2)　作成方針と手順

作成方針と手順について述べる。まず、「PISA型学力」「21世紀型スキル」の習得のためには、ソーシャルスキル（人と関わる力）の習得が基盤となると考え、これについて問うこととした。次に、多くのソーシャルスキルの中で、特に、学級集団に求められるものは何かについて検討し、精選した。その際、複数の先行研究の質問紙を検討し、主に田中博之(2013)が作成した「学級力アンケート」を参考にした。その結果、以下の５項目を問うこととした。

① 自分のクラスは、発言している人の話を最後までしっかりと聞いている学級だと思いま

すか。（傾聴力）
② 自分のクラスは、先生に言われなくても集合の時間、授業開始の時間、活動終了の時間などを守る学級だと思いますか。（けじめ力）
③ 自分のクラスは、係や当番などの活動に責任を持って取り組む学級だと思いますか。（責任力）
④ 自分のクラスは、みんなと違う意見や考えを認め合える学級だと思いますか。（共生力）
⑤ 自分のクラスは、小さなけんかやトラブルを話合いで解決できる学級だと思いますか。（解決力）

各項目の後に記述した括弧内の語句は、そのソーシャルスキルの内容を示したものである。またこの５項目は、①から⑤の順で基礎的なソーシャルスキルから発展的なものであると設定してある。さらに、この質問項目の追加により、質問紙の名称を「生活や学習、学級に関する調査」と改めた。

Ⅳ　まとめ

１　成果

学習指導要領の内容と過去８年間のSASAおよび全国学力・学習状況調査の出題内容や課題等を対照させたマトリクスの作成については、従来も同様のものを教科ごとに引き継いできた。しかし、学習指導要領の改訂を経て、新たに加えられた内容や対象学年が変更されたものを含めて、各教科がほぼ同一形式で再構成を図ったことにより、より的確な課題の洗い出しができるようになった。このことは、例年に比べ、Ａ・Ｂ問題においても新傾向の出題が複数見られたことや、同一対象児童・生徒の課題解決状況を見るために60次小学校における課題を63次中学校で内容を深化させて問い直した出題があったことに表れている。また、今年度４月に実施された全国学力・学習状況調査のデータ分析において課題が見られた内容について、直ちにマトリクスに反映させて問題作成に生かすことで、課題克服に向けた早期の対応が学年を跨いで可能になったと考える。

次に、新設されたＣ問題では、グローバル社会を生き抜くために必要な幅広い視野や論理的に考える力の涵養を目指した。折しも、同様の趣旨に基づき、中央教育審議会は高校・大学教育を抜本的に改革すべきであると答申しており、現在の大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、従来の「教科型」に加えて「合教科型」や「総合型」の出題が検討されている。このような変革期にあたり、国レベルでも未だイメージを示すに止まる新しい学力を測るための出題内容の一端を具現化したという点で、今年度の取組みは名実ともにチャレンジであったと評価できるのではないだろうか。そもそもSASAの目的は、福井県の小・中学校の児童・生徒の課題となる学習内容を的確に洗い出し、課題克服のために有効な指導事例を発信することで、授業改善を促進することにある。新たな学力観に基づくＣ問題を一つの契機として、学力向上に向けた検証・改善サイクルを加速させることができると考える。

児童・生徒一人ひとりが、学力を伸ばすことのできる学級集団とはどのようなものか、今回改訂した質問紙の調査結果からは、小・中学校ともに「みんなと違う意見や考えを認め合える（＝共生力がある）学級」ほど学力との相関が強いことが示された。次いで、小学校では、「先生に言われなくても時間などを守れる（＝けじめ力がある）学級」、中学校では、「係や当番の活動に責任を持って取り組む（＝責任力がある）学級」と学力との関連が強いことが示されるなど、良好な学級集団のすがたが具体的に見えてきた。

２　今後の課題

(1)　Ｃ チャレンジ問題の成熟

SASA2014の最大の特徴は、児童・生徒のさらなる学力の向上と授業改善を目的としたＣ問題の出題である。今年度は、無の状態から形あるものを生み出す過程だったこともあり、校種・教科を超えて互いに議論する場面が幾度となく展開されたことは特筆すべきことである。

Ｃ問題をさらに有意なものとするために、次のことに取り組んでいく必要がある。

ア　Ｃ問題の質の向上

Ｃ問題は、今年度に入って新たに出題が設定され、問題作成に取り組んできた。最初に問題作成の方針を策定したものの新しい問題タイプであるため、Ｃ問題の作成過程では、「Ｃ問題で求める力とは何か」、「Ｂ問題との相違点は何なのか」など「Ｃ問題」の定義をどう問題に反映するか常に問われ、試行錯誤が続いた。結果的には、問題作成を進めていく中で次第に形が明らかとなり、SASA2014の作成を終えて１つの答えを提示することができたが、まだ途上にあると考える。これからの時代を生き抜くために必要とされる力を調査するとともに、その力の育成に繋げることができるＣ問題となるよう問題作成力の向上に向けてさらに研究開発を進める必要がある。また、調査実施後にリサーチ（アンケート調査、聞き取り等）を行うなど問題作成側と学校側双方の間での意思疎通を図り、幅広く知恵を集めて議論を深めながらＣ問題の質を高めていくしくみの構築も必要である。

イ　Ｃ問題の活用推進

Ｃ問題は、活用力を包括しつつさらなる総合的な力を測る発展的な問題であり、その結果分析を受けて児童・生徒の学力向上に寄与するものとするために授業改善を求めるものである。Ｃ問題で求められる力を児童・生徒が身につけることができるかどうかは、教員の授業力にかかっている。しかし、Ｃ問題で求められる力を育成する授業の実践は、容易なものではないと考えられる。したがって、Ｃ問題を解決する力を身につけるためには、日頃どのような授業を展開すればよいのか、またSASA実施後どのような授業を展開すればよいのかなど授業改革の方向性を提示して、教員の授業力向上に向けて研鑽を促すことが重要である。

(2)　質問紙による学級集団の状況の測定

SASA2014では、小・中学校の児童・生徒の学級集団におけるソーシャルスキルに関する質問項目を質問紙に新設し、調査を行った。今回は、SASA調査結果分析処理システムプログラムの関係上、学級集団に関する質問項目数は５つに限られたが、今後は、学級集団の状況と学力との関連を明らかにするために、調査内容についての研究開発を進めていく必要がある。また、単年度の調査に留まらず、学級集団の状況に関する経年変化を分析するとともに、社会情勢の変化に対応した児童・生徒の学習状況を把握するために調査内容の改善を重ねていかなければならない。

Ⅴ　終わりに

SASAには、問題方針立案→問題作成→実施→結果分析→課題の明確化→授業改善→検証という一連の流れがある。県内の小・中学校の児童・生徒の学習・生活状況等を把握するとともに、調査結果を分析し、学習指導上の課題を明らかにして学力向上に資するというSASAの目的を果たすためには、各小中学校においてこのサイクルが機能していることが大事である。特に、SASA実施後の過程がうまく機能していることが重要である。

SASAを活用して児童・生徒の確かな学力向上を図るために、各小・中学校において今一度次のことについて検証および改善に取り組む必要がある。

・SASA活用に対する全教職員の共通理解

・SASA実施および結果分析を行う継続性のある組織体制

・SASA実施直後の学校独自の結果分析と速やかな事後指導
・県による結果分析提示を受けての学校独自の詳細分析および全学年への反映のしくみ
・授業改善のための研究体制

SASAは、これまで時代の変化に伴い、必要とされる新たな試みを取り込み変化を続けてきた。今後も新しい時代を見通し、全国の先駆けとなるべく進化し続けられるよう努力していかなければならない。

《引用文献》

○文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』株式会社東山書房、p.15
○文化審議会(2004)「これからの時代に求められる国語力について（答申)」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/007.htm)
○文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説　国語編』株式会社東洋館出版社、p.5、7
○文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説　道徳編』日本文教出版株式会社、p.4
○文部科学省(2005)『読解力向上に関する指導資料』
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/001.htm)
○文部科学省(2006)『OECDにおける「キー・コンピテンシー」について』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryo/06092005/002/001.htm)

《参考文献》

○P.グリフィン　B.マクゴー　E.ケア編　三宅なほみ監訳　益川弘和　望月俊男編訳(2014)『21世紀型スキル～学びと評価の新しいかたち～』北大路書房
○田中博之編(2013)『学級力向上プロジェクト～「こんなクラスにしたい」を子どもが実現する方法～小･中学校編』金子書房